

■発行■
2006年4月

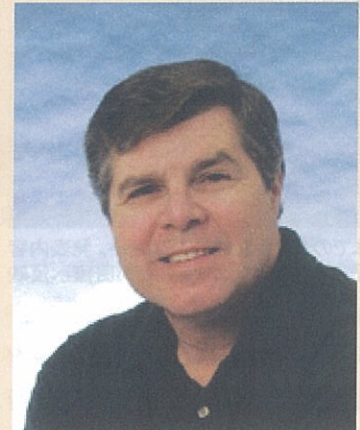
ファルマバレーセンター
E-Mail mail@fuji-pvc.jp
URL www.fuji-pvc.jp

「富士山麓から世界へ ～ファルマバレーは、いま!～」



〒411-8777 静岡県駿東郡長泉町下長窪1007 TEL055-980-6333 FAX055-980-6320
県立静岡がんセンター研究所1階

静岡がん会議2005開催 世界の叡智が研究所開設を祝う



■基調講演を行ったウィルトロート博士



先端医療・健康産業を集積し、県民の健康寿命を延ばすファルマバレー構想。18年度からはファルマバレープロジェクトと名称を変え、さまざまな分野で健康関連産業の振興を目指す。このプロジェクトのけん引役となるのが昨年11月に開設した県立静岡がんセンター研究所だ。ことしの「静岡がん会議2005」は研究所開設を記念し、海外のがん研究の先進事例やプロジェクトの成果が発表された。

3月4日、静岡がん会議（県・静岡がんセンター主催）が同センター研究所で開かれた。医療関係者、行政関係者、地域住民ら約140人が参加した。

ことしで8回目を迎えるがん会議は、昨年11月のがんセンター研究所開設を記念して、テーマを「ファルマバレー構想の新しい波」とし、がん研究と同構想が進める医工連携の成果が発表された。基調講演には、米国国立がん研究所（NCI）のナンバー2、ロバート・ウィルトロート氏を迎え、世界最先端のがん研究の動向が紹介された。

石川嘉延県知事は開会で、「医療、製薬関連企業が集積し、世界的水準のリゾート機能が存在する県東部に、世界の健康寿命伸長に貢献するための産業集積を図りたい」と挨拶。「このがん会議はプロジェクトの一層の推進に重要な役割を果たすものだと感じている」とがん

会議を高く評価した。実行委員長を務める同センターの山口建総長は、同センター開設までの静岡がん会議の経緯や意義を説明、この会議の開催でアジアのがん研究者同士のネットワークが構築されつつあることを披露した。

基調講演では、NCIの研究事業を統括する指導的役割を果たしているウィルトロート氏が、基礎研究と臨床応用を連携させて取り組むがん研究センターの業務を説明した。また、中国浙江大学がんセンターの鄭樹所長は、中国で効果を上げている消化器系のがん、乳がんなどへのスクリーニングや早期発見、早期診断ガイドラインについて講演した。続いてファルマバレー事業に関連した産学官の関係者・研究者9人が、包括的共同研究や個別研究、医工連携の成果などを発表した。

静岡がん会議の成り立ちと意図



■今までのがん会議のパンフレット。発表内容は冊子にまとめられ、より良いがん医療へ反映されている

静岡がん会議は、静岡がんセンターの開設に向け準備が始まった段階から、国際的な情報交換を目的に開催された。平成10年度から5年間は「アジアがん会議」とし、アジア各国の医療技術者から“アジアの知恵”を学んできた。その成果は静岡がんセンター整備計画に生かされている。

例えば、がん看護を研究した回では、ネパールの発表者が「ネパールでは

進に置いた。

この会議のもう一つの意義は、8年間に多くの海外の研究者を静岡の地に招いたことだ。これにより、招待者を中心とした、特にアジアのがん研究者によるネットワークが構築されつつある。難しい問題に直面した場合、相互に連絡を取ることでスムーズな情報交換ができる。中国、韓国など医療産業が十分に育っていない国もあり、今後静岡がアジアのがん研究や医療ビジネスのハブ機能となることを視野に入れている。

静岡がん会議2005

今回のがん会議2005は、「ファルマバレー構想の新しい波」をテーマに、基調講演を米国国立がん研究所がん研究センター部門長のロバート・ウィルトロート博士が行った。同センター

の研究指針はアメリカの指針であり、ここでの研究が世界のがん研究をリードしている。

講演で博士は、研究者同士の効率的なコミュニケーションや、基礎研究と臨床研究の連携強化の事例を解説。またトレーニングの重要性を指摘し、N



■NCIでの取り組みについて説明するウィルトロート博士

況に対しても、科学に基づく仮説を立て、そこにどのように介入するかを、遺伝子、プロテオミクス、画像ツールの開発を中心に紹介した。

講演後の質疑応答では、会場から英語による専門的な質問が次々に寄せられ、ハイレベルな学会を印象づけた。

基調講演に続き、同じく海外から招へいた中国の鄭樹教授が講演したほか、東京工業大学の赤池敏宏教授や三菱電機株式会社の蒲越虎主席研究員ら9人が、がんセンター研究所と進める共同研究について発表。産学官が連携したベッドサイドクラスター（患者、医療技術者から出るニーズを形にする産業クラスター）の着実な推進をアピールした。

全ての講演が終了したのは午後6時過ぎ。この後、参加者は研究所4階の交流サロンいずみに移動し、「真摯な研究とがん会議のようなフォーラムと同様、研究発展に必要なアルコールを摂取しながらの“ナイトサイエンス”」（石川知事）で、交流を深めた。

テーマ 一覧

〈アジアがん会議〉

- 平成10年度 アジアにおけるがん医療：現状と未来
- 平成11年度 アジアにおけるがん看護
- 平成12年度 アジア諸国の特徴的ながん
- 平成13年度 先端医療・健康産業集積構想
- 平成14年度 がん医療における患者満足度の向上

〈静岡がん会議〉

- 平成15年度 県民のためのがん対策
- 平成16年度 富士山麓ファルマバレー構想の推進
- 平成17年度 ファルマバレー構想の新しい波

最先端の医療機器はないが、がんで苦しんでいる患者さんのそばにじっと座って手を握り、その姿勢を長い間続けている」という話をスライドを利用して披露した。それは、静岡がんセンターが目指す「患者に寄り添う医療」を考えるきっかけになった。

平成15年度からは名称を「静岡がん会議」と改め、主題を静岡県が進めるファルマバレープロジェクトの推

CIでの各分野にまたがる効率的なトレーニングメニューを披露した。さらに、子宮頸がんの主な原因となるウイルスの発見と、それをもとにしたワクチン開発について、製薬企業の治験でも良好な結果が出ていることを説明、がんの予防に新たな道が拓けたことを印象づけた。個々のがん、あるいはがんの進行状



■交流会で歓談する参加者

4大学TLOシーズ・マッチングセミナーを開催



■活発な質疑応答が行われた研究発表

3月17日、ファルマバレーセンター主催による4大学TLO(大学学内、技術・特許移転機構)シーズ・マッチングセミナーが、がんセンター研究所で開催され、同センター医師や研究所の研究者、地元企業関係者約50人が発表内容に耳を傾けた。

発表者は、静岡県と事業連携に関する協定を締結している東京工業大学、東京農工大学、早稲田大学と地元にある静岡TLOやらまいかの研究者やスタッフ。

今回は静岡がんセンターの臨床現場から提案された各種ニーズを事前にTLOに提示していたため、大学の発表内容も限りなく実用化や共同研



■研究成果をビジネスにつなげようと、真剣に発表を聞く参加者

究を意識したものになった。

腹腔内組み立て式タバコ縫合器の開発に取り組む東工大大学院総合理工学研究科の小俣透助教授には、参加した医師から共同研究の可能性について具体的な提案が行われた。

また、心理状態を推定するデジタルヒューマン技術の発表をした早稲田大学客員講師(産業技術総合研究所)の三輪洋靖氏には、現場を知る看護の専門家ならではの質問が出るなど、発表された4テーマごとに活発な質疑や製品化、共同研究のためのパートナー募集などの打診が行われる積極性あふれるセミナーとなった。

産業支援NW、東葛テクノプラザを視察

ファルマバレープロジェクトの推進と地域産業振興を図る富士山麓産業支援ネットワーク会議のコアメンバー11人が2月23日、千葉県柏市にある東葛テクノプラザを訪問。施設見学と産学官連携による共同研究の取り組みについて意見交換を行った。

東葛地域は千葉県内の中小企業の約40%が集積する。同プラザは平成10年11月、機械金属、メカトロ関連産業の一層の振興と「若さと健康」をキーワードにした第二次創業の促進を図る目的で設立された。

施設は地上6階建、延



■施設内を熱心に見学する参加者

べ床面積11,881㎡。3~6階が貸し研究室で、現在47室にベンチャー企業を含む38社が入居している。

研究開発事業(技術指導、依頼試験、機器開放計測・分析等)、インキュベータ事業に重点をおき、専門分野ごとに8人のコーディネーター(企業出向者、OBなど)を配置し、共同研究支援や産学官連携のコーディネートを積極的に進めている。また、同プラザは東大、千葉大、東京理科大など県内理工系大学の研究者が無料で技術相談、指導に応じている。

秋葉原から、つくばエクスプレスを利用し33分で柏の葉キャンパス駅に着く立地条件に加え、東大柏キャンパス(2研究所と1大学院)、国立がんセンター東病院や複数の工業団地に囲まれた東葛テクノプラザの今後の展開は各方面から注目されている。



■東葛プラザの外観

静岡県版電子カルテシステムが稼動!



■CDには処方歴、検査結果、画像データなどが収納され、セカンドオピニオンへの有効活用が期待される。下は情報提供CD見本

静岡県が進める電子カルテシステムの本格稼動が始まった。

この事業は医療機関への電子カルテシステム導入を通じて、診療情報を共有化することで病診連携、病病連携を促進し医療の質の向上と地域間格差を是正しようというもの。ファルマバレープロジェクトの一環で16年度から開発が始まった。

同システムは、各医療機関や開発メーカーによって異なる医療情報のコードや通信規約などを国際基準で標準化した。また、紹介状管理、画像情報提供、診療記録管理、看護情報支援、臨床研究データベース、定型文書作成支援といった病院が必要とする機能ごとにシステムの導入ができるのが大きな特徴だ。

患者側のメリットも大きい。例えば引越してかかりつけ病院が変わったり、セカンドオピニオンが必要な場合に、今までの投薬歴や検査結果、レントゲン、CT画像などを全てCD-ROMにして次の病院に手渡せる。それにより、転院後の無駄な検査を省くことができ、時間的、金銭的な負担が軽減される。患者本人が自分の治療内容や検査の内容、処方内容を確認できるので、安心して医療を受けることができる。

ことし1月から沼津市立病院、市立袋井市民病院で稼動を開始する。国際基準にかなったシステムのため国からも高い評価をうけ、今後は国庫委託事業として全国版に改修し県内のみならず全国の医療機関に配布予定だ。



Column

コラム

温泉マイスターとかかりつけ湯、温泉活用テーマに初の合同研修会

3月14日、県健康福祉部とファルマバレーセンター主催による「温泉マイスター&かかりつけ湯合同研修会」が伊豆の国市内で行われた。

温泉マイスターは、温泉に関する知識や技能を持ったいわば“温泉の大家”を育成することを目的とした県の認定制度。健康増進と癒しを提供する伊豆の温泉宿のネットワーク「かかりつけ湯」との連携を図ろうと、今回初めて合同で開催され、温泉マイスター、かかりつけ湯モデル施設、行政関係者など約170人が参加した。

財団法人中央温泉研究所の甘露寺泰雄所長が基調講演を行った。伊豆半島の温泉資源の特徴や、適正管理の基礎知識、健康と温泉などについて長年の研究成果の一端を披露。「温泉で病気が治るのではなく、温泉に行き、人と話をしたり散歩などを通じ

て刺激を与えることで、人間のもつ自然治癒力を高める効果がある」と解説した。

パネルディスカッションでは、温泉マイスターの今後の展開やかかりつけ湯との協働について議論した。駒の湯源泉荘の高橋誠社長は「地元の人が地元の温泉を知らない。日常レベルで温泉を利用し、理解を深めるのが理想」、東部保健所の青木行雄衛生環境部長は、温泉と医療費の相関について西伊豆町での事例を発表、予防医学への貢献に期待した。



■伊豆の温泉について熱弁をふるう甘露寺所長

Information



締め切り迫る! 「かかりつけ湯」追加募集

健康増進と癒しを提供する伊豆の温泉宿の新たなブランド「かかりつけ湯」は、事業拡大のため、追加募集を行っています。

温泉自慢の宿、癒しと健康づくりに関するサービスを積極的に提供する施設からのご応募をお待ちしています。

しめきり 4月24日(月)

詳しくは、ファルマバレーセンター(企画部)

TEL055-980-6333

FAX055-980-6320

e-mail mail@fuji-pvc.jp

またはかかりつけ湯HP

<http://www.kakaritsukeyu.jp>

をご覧ください。